

---

# そらくらい

藍沢 砂糖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そらくらい

### 【Nコード】

N5970M

### 【作者名】

藍沢 砂糖

### 【あらすじ】

人気のない薄暗い山道、獣道。

ここは現世か幽世か。

そんな陰鬱で鬱蒼とした山の中にそびえる巨大な古い鳥居。そこで能面を被った一人の少女と出逢う。

その少女は道案内をしてくれる間、とある怪談を語り出した。

それは「そらくらい」という怪物の話。

こんな山の中で何してるん？

しかもこんな時間に。

もうすぐ暗くらなるで、空見てみいや。ゆうても木の枝の隙間からちらちらしか見えへんけど、もうそろそろ日い沈んでまうやんか。ここらへん昼でも暗いけど夜なんかほんまに何も見えへんようなんねんで。夜は真っ暗で危ないからウチらでも一人やったらよう歩かれへんわ。

てか一人なん？

アンタ、シャツの袖もズボンの裾もドロドロやん。けったいな格好してるなあ、ほんまにどうしたん。

しかも汗だくで。

ええと。

そやなあ。

わかった、アンタ道迷ってんやろ。ほら図星や。

なんや迷子やったんか。まあここらへんは道も入り組んでるし人通りもあんまりないからみんな迷いやすいねなあ。慣れてない人やったらアンタみたいな大人かてすぐ迷ってまうで。

え、ウチ？

ウチは散歩しとってん。

のーんびり歩いて、んで日い沈むまでぼんやり空でも眺めながら座っとなん。この鳥居のとなり。

なあ、おっきい鳥居やろ。

もともと何色やったんか分からんぐらい色もはげてるし、下の方の柱とかちよっと腐ってもうてんねんけどな。

ほら、上の方見上げてみ。

上の方とか木の枝が邪魔してあんまり見えへんけど額に何か書い

てるっぽいやん。でも字い掠<sup>かす</sup>れてもうてて何て書いてあったんかは読まれへんねんけどな。

なんせ古い鳥居やで、いつからここに建ってんねんやろ。

で、ウチはここで一日ぼけえってしてるわけ。

退屈そうやなあ、て？

いや、そんな事ないで。昼間は色んな鳥とか動物の鳴き声とか聴こえるし、夕方なっても耳澄ましたら虫の声なんかも聴こえてくるで。

風なんか吹いたら木い揺れて葉っぱが擦れる音とかもあるし、一見静かそうに思える山ん中も結構賑やかやねん。

ああ、そうこうしてる内に日い暮れてまいそうやわ。  
そや。

ウチが道案内したるか？

え、なんで？ そんな遠慮しなや。ウチかて丁度家帰ろう思ってたことやし、そのついでやん。せやから氣い遣わんでええって。

ウチ？

ウチは……まあ誰でもええやん。そんな怪しいもんやないって。服装？ 山ん中でも浴衣<sup>ゆかた</sup>着とつても別に普通やん。ほらほら、見てやこの模様。綺麗やろ、紫色の朝顔。この浴衣めっちゃお氣に入りやねん。下駄の鼻緒の色ともよう似合ってるやろ。

言つとくけどウチ、座敷わらしとかみみたいな妖怪とちゃうからな。第一ウチは座敷じゃなくて家の外におんねんから。

え、顔？

ウチの顔が、何かおかしい？

……。

ああ、これ。お面。

これな、鳥居の先にあるお店で売っててん。えっと確か女面とか小姫とか言う種類の能面やねんて。  
どうしたん。

気持ち悪いん、能面<sup>これ</sup>。

まあ確かに古いお屋敷の倉庫とかにありそうなやつやしな。顔も、のべえってして無表情やけど、その下のウチの顔はにこにこやで。

何でお面なんかしてんのかって？

そんなん……どうでもええやん。

ほら、それよかどうするん？ 行くん？ 行けへんの？

このまま夜なってもうたらほんまに真っ暗で何も見えへんようになるし、それこそこんな山奥で野宿って事になるで。

しかも野犬も出てくるねんで。ゆうても所詮犬や思って野犬なめとったらあかんで。あいつら群<sup>むれ</sup>で襲ってくるから、なんぼアンタみたいな大人でも殺されてまうで。鼻も良いから怪我なんかしてもうてたら血の匂い嗅ぎ分けてすぐにやって来よる、人間の鼻なんかと比べ物にならへんからなあ。

どうしたん……顔、真っ青やん。

もしかして、どっか怪我でもしてんの？

え、怪我はしてないんや。血い出てへんねやったらそんなにすぐには見つかれへんとは思うけど、それでも汗の匂いとかでその内に寄って来よるかもしれんなあ。

行こや、ほら。

この鳥居くぐって暫<sup>しば</sup>く歩いたらふもとの県道まで出るわ。

一本道やしすぐ着くわ。

何してんの、はよ行くで。

はあ？

さっき来た時はこんなとこに鳥居なんかなかった？

何寝言ゆうてんの。

えらい迷ってて他のよう似た場所とごっちゃになってるんちゃう。しっかりしてや、ほんまに。

はよせな夜なつてまうで。

もうそろそろ大分暗なってきたし、この先って足場悪い上に坂道なってるからこけて怪我せえへんように足元とか気い付けや。

ほら、こっちやで。



それにしても汚い格好やなあ、泥だらけやん。

一体どんだけ迷ってたらそんななるんよ。え、昼過ぎから？

そら災難やなあ……。

そんな暑い時間から山<sup>ヤマ</sup>中で彷徨<sup>さまよ</sup>ってたんや。そんなんやったら野犬に襲われへんかった事なんかより、地元の猟師さんに熊と間違われて鉄砲で撃たれへんかった事の方がよっぽど凄いわ。

ああ、熊？

出るで。ほんま偶<sup>たま</sup>にやけどな。それにしてもそんな長い事うろろしとって、よう危ない動物に遭えへんかったな。

でも鳥居よりこっち側には野犬も熊もおれへんで。何でかって訊<sup>き</sup>かれても、そうゆう仕組みなってるねん。

それよりアンタ、こんな山奥で何しとったん？

……。

遠足の下見。

へえ、アンタ小学校の先生やってんや。

二年生の担任なんや、ふうん。泥だらけのけったいな格好しとったから全然そんなふうには見えへんかったわ。

夏休み明けの九月の遠足でこの山に来るって事で、色々と見て回ってたら一人だけ迷子なってもうたって訳やな。

そやけど何でまたこんな山なん？

キャンプ場でもないし、綺麗な沢も美味しい食べ物も何もあれへん。こんなところ子供が観ておもしろいもんなんか何もないやん。

あ、子供に自然の中で生きていくって事を学んでもらうんか。なるほどなあ、そうかそうか。

最近の小学生は家の中でばかり遊んでるから虫もろくに触った事ないんやて、そんな子らにちよつとでも自然にふれてもらうんや

な。

子供らも喜んでくれたらええな。

アンタ子供好きなん？

いやいや、子供の話してる時アンタ初めて笑ってたから。

ふうん、アンタも子供おんねや、何才？ 三才か。ちっちゃい子

おんねんなあ。名前は何て言うん？

みゆ。

美しいに優しいって書いて美優<sup>みゆ</sup>ちゃんって言うんや。へえ、可愛い名前やなあ。目え入れても痛くないって、美優ちゃんも愛されてんねんなあ。ところでその美優ちゃんは今何してんの。

あれ、どうしたん。急にいそぎ出して。

ああ、保育園か。

って事は保育園でアンタが来るん、ずっと待ってやんねやろ。そらはよ迎えに行ったらなあかな。

ウチ？

ウチは一人っ子やで、きょうだいはおらんねん。ウチも美優ちゃんみたいなちっちゃくて可愛い妹欲しいわ。ええお姉ちゃんになれるかな、ウチ。

それよりアンタ、嬉しそうな顔してるな。

美優ちゃんの話始めてからさっきよりずっとにこにこしてるやん。ほらまた笑った。ほんまに好きやねんな、美優ちゃんの事。

ま、そらそうやわな。

あ、ほら。

ちよっと奥の方見てみ。

前から誰か歩いて来たやろ……。せやけどあの人に話し掛けたり、目え合わしたりせん方がええで。況<sup>ま</sup>してや顔見てびっくりして大声上げたりなんか絶対せんというてや。ほんまに絶対やからな。

ほら、来るで。

顔伏せときや。

……。

……………。

……見た？

アンタより汚い格好したおっさんやったなあ。向こうもウチらの事、気付いとったんやろうけど気にしてへんかったみたい。

びっくりしたやろ。

頭割れて血いもだらだら出てたやろ。しかもぼおつとしてふらふら歩きながらそのままどっか行っただわ。

あんな……

今すれ違ったおっさんな……

……死んでる人やねん。

嘘ちゃうで。信じられへんかもしれへんけど、それでもほんまやもん。あのおっさんは死んでる人やねん。

さつき鳥居くぐったやんか。

あそこからやねん。せやからゆうてこの道はまだ天国でも地獄でもないで、まあ現世うつしよでもないねんけどな。

別にアンタが死んでもうたって事とちゃうから心配要らんで、安心しいや。

ここは丁度その真ん中、現世うつしよと幽世かくりよの境目の道やねん。だからアンタみたいな生きてる人も通れるし、さっきの血塗れのおっさんみたいな死んでる人も通れる。誰でも通れる裏道みたいなもんやねん。え？

ウチは生きてるか死んでるか？

それは……。

あ、そんな事よりウチはアンタをあの世に引き摺り込もうとしてんのとちゃうで。それはほんまやから誤解せんといてや。

ほんまにふもとまでの近道やねんで。

でもな、ここ、道間違えたら……危ないねんで。ほんまに死んでまうねん。せやからウチが案内してんの。

最後まで一本道やねんけどな、迷うかもしれへん。そうになったら



自分でも気付かん内に地獄に迷い込んでまうかもしれへん。

一本道で迷う筈あれへんって？

……。

……ほんまに？

じゃあ訊くけど、今は坂道上ってる？ それとも下ってる？

ウチは鳥居くぐる前、坂道になってる、としか言ってなかったけど……アンタは今どうなん？

へえ。

ああ、そうなん、下ってるんや。

ふふふ……。

ほんまに下ってんねんな、ここは下り坂で間違いないんやな？  
そうなんや……。

さっきの人は幽霊なんかって？

さあ、幽霊って言い方が正しいかどうかは分からへんけど、まあそんな感じなんちゃうかな。兎とに角かく、死んだ人や。

あ、そや。

幽霊って何やと思う？

そうそう、死んだ筈の人がひゅうどろどろってな具合に柳の木の  
下から化けて出てくるやつやんな。

いつから幽霊なんか出てきたか知ってる？

これウチのお祖母ばあちゃんが言ってた話やねんけどな、大昔は幽霊  
なんて言葉なかったんて。大昔言うたかて平安時代とかの話やで。  
アンタも学校の先生やったら社会の歴史とかもウチよりは詳しいや  
ろ。

平安時代とかは幽霊がおらへんかわりに何がおったと思う？

そう……

……鬼や。

でも鬼って幽霊とは全然ちゃうよな。幽霊はふわふわして弱そう  
な感じやけど、鬼ってごつごつしてて強そうやもんな。例えば台風

とか雷とか、昔は正体の分からへん恐いもの全部の事を鬼って呼んでてんて。

その鬼ってどこに住んでると思う？　そうそう、地獄やんな。地獄って言うたら悪い事した人が落ちる場所やな。人殺したり、物盗んだり、嘘吐いたりした人が落ちて鬼らに虐められねん。

実際そんなん信じてる？

見た事ないからよう分からへんよなあ。

でも、昔の人って地獄はほんまにあるんやって信じとってん。今みたいに科学とかも発達してへんし、みんな信心深かったからなあ。何かあったら南無阿弥陀仏ゆうて念仏唱えとったんやて。

せやからみんな、悪い事はしたらあかん、誰も見てへんでもお天道様と閻魔様はちゃんと見てるんやって思って悪い事はせんかってん。

地獄落ちんのは恐いしな、やっぱり。

でもみんな地獄なんか信じへんようになってん。

戦国時代になったらな、国中荒れて毎日生きるか死ぬかの生活になつてん。戦争ばかりやから人なんか殺して当り前やろ、食べ物もないから人から盗るしかないやろ、生きてくために嘘も吐かなあかんようなる。

それからみんな地獄なんか恐くなくなつてん、今生きてる現世も地獄みたいなもんやったから。

みんな悪い事しても平気やった。

欲しいものがあつたら殺して奪う、そんな世の中やってんて。

それから戦国時代が終わって平和な世の中になった。勿論、人殺したらあかんとか物盗んだらあかんってゆうような法度も厳しなつて、そら悪い事したら捕まるようになってるで。御用じゃ御用じゃ、ゆうてな。

でも、地獄なんかみんな信じてない。誰も見てへん所で隠れて悪い事するけつたいなやつもおったんやて。

浮かれた世の中って書いて、浮世。人間って暇になると色んなこ

と考え付くもんやねんな。

例えば人殺しする、そしたら自分が死んでから地獄で鬼に虐められる。違う。自分が生きてる内に仕返しされんねん、それも自分が殺した本人に。

そう……。

……幽霊の登場や。

死んだ筈の人が、恨めしやあ、言いながら化けて出て来んねん。しかも自分に仕返ししにやで。

めっちゃ怖いやろ。

播州皿屋敷って知ってるやろ？

手違いで皿割ってもうた奉公人の女を斬り殺したら、毎晩屋敷の井戸の方から啜り泣く声が聞こえる。こっそり覗いてみたら死んだ筈のその女が皿を数えてた。それからその家は斬り殺された女の祟りで色んな悪い事が起こって、滅びてしもた……。知ってるやんな、この話。

そうそう、お菊さん。

こんな怪談もあって江戸時代からその幽霊ってのが地獄の代わりに広まってんな。人殺したら化けて出て来られる……せやから人殺しはやったあかん、って感じかな。

話戻るで、幽霊って何やろって話。

つまり幽霊ってのは現世に仕返しする為だけの存在って事、だから存在そのものが全部怨念で出来てるとちゃうかなあ……ってお祖母ちゃん言うてた。

あ、それから……。

今言うた皿屋敷のお菊さんも四谷怪談のお岩さんも女やけど、特に女の恨みは怖いねんで。

般若って分かる？　そう、あの鬼のお面。

あれ、女の人やねん。

簡単に言うたら今ウチが着けてる小姫のお面が恨みで般若になる

って事やな。女の怨念は鬼になるねん。オニって言葉はオンナが訛なまって出来たって話もあるらしいしな、ほんまかどうか知らんけどな。オンナ（、、）はオン（、、）念でオニ（、、）になるらしいで。

怖いなあ。

どうしたん、顔色も悪いし変な汗かいてるやん。ウチの話が怖かったって訳とちゃうやろ。

ちよつと疲れた？

なんかふらふらやし木の根っこに躓つまずいて転んでまいそうやん、危なっかしいなあ。ウチが手え繋いどいたろか。

ふふふ、冗談やって。

そや。

すぐそこにお茶屋さんあるから、ちよつとだけ休憩していこや。



お姐ねえさーん、よもぎ団子と冷たい緑茶ちようだーい。あ、一つでええで。

ありがとう。

ほら買こうて来たったで。お金？ いらんいらん、ウチの小遣いから出しといたるわ。今日は特別やで。

こんなところにお茶屋さんあるなんてびっくりしたやろ。古臭くてちっちゃい店やけどこの道通る人らにとったら何とも嬉しい休憩場所やねんで。

そんな事よりほら、このよもぎ団子はよ食べてみ。頬っぺた落ちるぐらい甘い餡あんこ子も入っててむっちゃ美味しいねんで。

な。

むっちゃ美味しいやろ。  
ウチもこのよもぎ団子むっちゃ好きやねん。他にもみたらし団子とか、かき氷とか売ってんねんけど、みんな美味しいねんで。

え、ウチ？

ウチは……ええわ。アンタが全部食べたらええやん、遠慮せんといて。

お面取るん厭やし……。

これ取ったら、その……零れるし……。

あ、いや何でもないで。まあ兎に角ウチはあんまりお腹減ってないから大丈夫やから気にせんと食べてや。

そんな事よりお茶屋さんのお姐さん美人やろ。

何、苦い顔してるん。あのお姐さん和服も似合ってるしめっちゃ美人やんか、まあ……横向いとならやけど。顔半分、骸骨やけどな。そやで、あのお姐さんも死んでる人。恋人に裏切られて自殺しはってんで、それも五十年も昔の話らしいねんけどな。男って非道い生き物やねんなあ、ほんま。

全部食べた？

団子もお茶も美味しかったやろ。

そうそう、これもお祖母ちゃんが言ってた話やねんけどな。黄泉戸喫って知ってる？ 日本の神話にあるらしいねんけどな、あの世の食べ物を食べる事やねんて。それでな、あの世の食べ物を食べると現世に帰られへんようになんねんて……。

なあなあ……。

よもぎ団子、美味しかった？

……。

あはは、冗談やって。

今アンタが食べたんは全部現世の物やで。ここはあの世とこの世の丁度真ん中やからここのお茶屋さんは何でも取り寄せ出来んねん、現世からでも幽世からでもな。ほんまに何でもやで、凄いやろ。

ほら見てみ。

お店の裏口から禪一丁のおっちゃん出て来たやろ。あのおっちゃんが飛脚やって、頼んだら色んな物取り寄せてくれんねん。

ウチのこのお面もここで買ってたんで。ええやろ。

あのおっちゃん、ほんまに働き者やねんで。こんなじめじめして蒸し暑い時期やのに文句一つ言わんとあの世とこの世を走り回ってんねん。

まあ文句言いたくても言われへんのやろな。

あのおっちゃん……首から上ないし。

なあ、お姐さん。ウチが頼んでたやつ届いてる？

今来たんや。良かった。

じゃあ今貰って帰るわ、ありがとうな。あ、これか……。思ったより重たそうやなあ。まあ今は温和おとなしく寝てるみたいやから頑張かつって担いで帰るわ。

ん？

これ？

ああ、これお姐さんに頼んで取り寄せといて貰ってん、地獄から。世にも珍しい愛玩動物ペットやで、ずっと飼いたかってん。

あ、そや。お姐さんあと鉄はさみか何か貸しといてくれへん？ 袋の紐ひも

切らなあかんやろ。鉄ないんや、ほなこの包丁借りて行って良い？

ありがとう、また今度返しに来るわ。

ほなそろそろ行こか。よいしょ、あ、やっぱり重たいなあ。手伝わんでええで、これはウチが自分で持って帰るし。

そんな事よりアンタも氣い付けや、この麻袋の中に居るん愛玩動物ペットトって言うても地獄の生き物やねんからな。

空もかなり暗くなってきたしそろそろ行こか。

もうちよつとでふもとまで着くわ。



なあ、アンタって小学校の先生なんやろ。

いっつも子供らにどんな話してるん。ああ、なるほどな。友達を大切にしようとか、人を騙したらいけないとかやな。相手が

小学二年生なんやったらそんなんがええんかもしれへんな。

ウチにも何か興味深い話してや。<sup>おもしろ</sup>

え、そんなん急に言われても無理って？

なんやあ、先生やねんやったら色んな話知ってると思ったのになあ。こんな暗い山道で黙りこくってたら氣い滅入ってまうやん。

何か話しよや。

そやなあ、じゃあウチが何か喋るか……そや、怖い話でもしよか、怪談。

だってウチそんなんしか知らんもん。こんな暗いところでしても意外と盛り上がって楽しいねんで。

アンタが話せえへんねんからしゃあないやろ。

ううん、そやなあ。じゃあ地獄に住む獣、『そらくらい』って化け物の話でもするわ。そんな怖い話ちゃうで……アンタが正直者なんやったらな。

あんな、そらくらいって言うんはめっちゃ恐ろしい怪物やねん。

因みに獾は知<sup>ちな</sup>つて<sup>ばく</sup>るやんな、あれは悪い夢を食べてくれるやろ、言うたら良いやつや。じゃあ、そらくらいは何食べると思う？

嘘、つまり空言<sup>そらごと</sup>を喰らう怪物やねん。それで『そらくらい』って言うねん。

それこそちっちゃい時は子猫みたいに可愛らしいねんけど、嘔吐いたらどんどん大きくなって終いには虎よりも大きい醜い化け物になってまう、しかも大人になったそらくらいってめっちゃ凶暴やねんで。

人間も赤ちゃんの時はお母さんのおっぱいしか飲めへんけど大きになったらそんなん飲めへんようなるやろ、そらくらいも一緒や。

それでな、大人になったそらくらいは何食べると思う？

分からへん？

大人になったそらくらいはな……

……嘔吐きそのものを食べんねん。

……人間や。

……嘔吐く人間を食べるんや。

これは大昔の話らしいんやけどな、とある男の人が山奥の小屋に一人で住んどってんてさ。

それで真冬の吹雪の夜に一人のお爺さんが訪ねて来てんて。

道に迷うてしもた、夜が明けるまで、否、せめて吹雪が止むまでええから家に置いていってくれ、何でもするから。

お爺さんは涙ながらにそう言うた。

せやけど、その男はな……。

うちには人に食わせるような食べ物もないし、人を一晚泊めるような広さも余裕もないから他あたってくれ言うて断ったんや。

お爺さんは、土間でもええから屋根の下におらせてくれ、何でもするからお願いやって必死に頼んだんやて。

そしたらその男はな、無理なもんは無理なんや早う出で行ってくれ、言うてそのお爺さん追い出したんや。

吹雪の夜にやで。

ぴしゃりと閉まる戸。

可哀想に、そのお爺さん寒うて寒うて死んでもうたかもしれへんな。

その後、また小屋の戸をたたく音が聞こえたんや。男はまたあのお爺さんが来た思うて無視しとったんやて。そしたらな……今度は女の声や。

……誰か居ませんか、助けて下さい。

男が戸を開けたら、それは美人な若い女の人がおったんや。それは雪のような真っ白い肌の娘さんや。

……助けて下さい、道に迷ってしまいました。

……せめてこの吹雪が止むまで、屋根の下に居させてもらえませんか。

……寒くて寒くて、死んでしまいそうです。



……お願いです、どうか。

娘さんは泣く泣く男に頼み込んだ。男に縋<sup>すが</sup>り付くその細い指はかじかんで鱗<sup>ひび</sup>割れて、血が滲<sup>しみ</sup>nder。寒うて寒うて口唇も紫色や。

まさに娘さんの命の灯火は吹雪に掻き消される寸前やった。でも、消えそうな灯りって何であんなに綺麗なんやろな。

男はな、その美しい娘さんに一目で惚れてしもうてな。喜んで小屋の中へ迎え入れたんやって。

さっきのお爺さんは無理矢理にでも追い出したのに、相手が美人やったらすぐこれや。ほんまに……昔から男って非道い人ばかりやねんな。

美人な娘さんが来てくれて嬉しなった男はな、その娘さんに温かい雉<sup>きじ</sup>汁まで御馳走<sup>ごちそう</sup>してん。

さっきは食べ物なんかないって言うと思ったのに……。

娘さんはそれは感謝したわ。なんせ吹雪の夜に一人で彷徨って、このまま野垂れ死ぬって思ってた所に、小屋の中に入れてくれた上に温かい雉汁まで食べさせてもらてんからな。まさに地獄に仏やわ。

……お優しい方なのですね。

娘さんは言うた。

そしたらその男、何て言うたと思う？

……俺は困ってる人が居たらほっとけん。

……こんな吹雪の夜に追い出す訳にはいかん。

……困った時はお互い様や。

やて。

びっくりするやろ、とんだ二枚舌の大嘘吐きや。ついさっき訪ねてきたお爺さんは追い出したのやで。

その時や……。

小屋の天井が軋<sup>しん</sup>んだんや、みしり、って。重い何かが動いたような音。何や思っ<sup>て</sup>男が天井見上げた瞬間、物凄い音立てて天井が割れた。

真っ暗な天井裏から飛び出して来たんは、そらくらい。

大人のそらくらいや。

そらくらいの大口が刀みたいに鋭い牙剥いて男目がけて襲いかかった。それで、その嘔吐きの男は……頭、喰い千切られてしもたんや。

男はそらくらいに喰われてもうた。

実は、その小屋の天井裏にはずっとそらくらいが棲んでて、男が毎日吐く嘔を食べて大きくなっとな。

そらくらいはまた別の嘔吐きを探して吹雪ん中に消えて行った。

そんなただの昔話やろって？

まあ、昔話って言うたら昔話やねんけど。でもこれほんまにあった話やねんで、信じられへんかもしれへんけどな。

え、そんな言われたってほんまの話やねんからしゃあないやんか。ウチに言われたかて困るって。

せやけどアンタも見たやろ……

……さっきの飛脚のおっちゃん。

あの人やで、そらくらいに喰われたん。まあ今となったらちゃんと反省して正直者で働き者なってるわ。嘔吐こうにも口どころか首から上全部なくなってもうてるしな。

空言を喰らうって言うてそらくらいやねんけどその名前、ほんまはもう一つの意味もあんな。

空暗い。

そらくらいは空が暗くなる時間、つまり夜んなったら動き出すねん。いかにも獰猛な怪物らしいやろ。

ああ、大分暗くなってきてもうたなあ。

ウチらものんびりしてたらほんまに夜なつてまいそうやしちよつと急ごか。はよせなこの子も起きてまうし……。

ん……？

この麻袋の中？

そう、そのまさかや。

……そらくらいの子供やで。

大丈夫やって、もうウチは嘘なんか吐けへん正直者やからこの子はずっとちっちゃくて可愛らしい子供のままやもん。

そんなに恐がらんでもええやん、そらくらいの子供は温和おとなしいし猫みたいでめっちゃ可愛いねんで。

あ、そうや。

それよりアンタ……ウチとおる間は絶対に嘘吐かんというや。この子、可愛くなくなってまうから。喰われても知らんで。

あらあら、空も暗なってきたわ。



もうすぐ着くで。

この先にな、別れ道あんねん。それぞれに入口んとこみたいなきい鳥居があって、片方が幽世かくりよに通じてて、もう片方が現世うつしよ、ふもとの県道に通じてるわ。向かって右側が県道やから間違えへんようにな。

アンタ、学校の先生なんやったら悪い事なんか絶対せえへんやんなあ。寧ろ悪い事した子供叱る立場やもんなあ。

人に嘘吐いたり騙したり裏切ったりする事なんかないやんな。ちよつとな、アンタに聞いて欲しい話あんねん。ウチが悪い子か、どうか。もしウチが悪い子やったら……叱ってな。

ウチな、めっちゃ仲良しの友達おんねん。

カナちゃん言うねん、目えも大きくてくりくりしててめっちゃ可愛いねんで。

カナちゃんとは幼稚園からずっと一緒でな、家も近かったからいつとも一緒やった。小学校の時の夏休みなんかそれこそほんまに毎日一緒に遊んでてん。

駄菓子屋でソーダアイス買うて二人で半分こしたり、カナちゃん

の家の縁側に腰掛けて二人でスイカ食べたり、二人で一緒に自由研究したり、自転車で知らん町まで冒険しに行って迷子になって後で母さんにえらい怒られたりもした。

一番楽しかったんは中学生なってから二人で電車乗って遠くの海見に行った時やな。別に何の見所もない寂れた漁村みたいなところやあってんけどカナちゃんと一緒やったからそれでもめっちゃ楽しかった。

ぼろぼろの漁船に勝手に上ってな、水平線に沈んで行く真っ赤なお日様を何となく眺めててん。綺麗やったで。

そこでカナちゃんと約束してん、一生友達やでって。

ウチにとってカナちゃんが一番の友達、カナちゃんにとっても多分ウチが一番の友達やと思うわ。

ウチら親友やねん。

お互い隠し事なしで何でも相談し合ったし、絶対嘘吐いたりもせえへんし、約束も必ず守ってたんや。

あの時までではな……。

一昨日、お祭あったやろ。

ウチらも今年高校受験やから思いっきり遊べんのも夏休みが最後や、夏祭りで思いっきり楽しもう。そんなふうに約束しててん。

二人で一緒に百貨店行ってお揃いの浴衣も買った。

紫色の朝顔のがらが入った夏らしい浴衣や。試着して二人して姿見の前に立ったらウチら二人そっくりやって面白かった。お店の人に「姉妹ですか？」て訊かれた時、何かよう分からんけどめっちゃ嬉しかった。帰りしな、どっちがお姉ちゃんなんやろな、言うて二人で笑ってたん。

楽しかった……。

で、夏祭りの日。

その日はな、夏休みやってんけど偶々（たまたま）登校日でお昼まで学校行かなあかんかってん。勿論登校日もカナちゃんと自転車もちろん二人乗りして一緒に行ったで、雲一つない朝からよう晴れた日では

んまに暑い日やったわ。

……今日の夜、どこに集合しよか。

早速今夜の夏祭りの話題。

それでウチらは夕方の六時に郵便局の前のバス停に集合しよって事になってん。夏が終わってもうたらウチら三年は勉強漬けや、カナちゃんとかんな思いつきり遊べるんは来年の春までないかもしれへん。そう思うとちょっと寂しいけど、それ以上に夏祭りがめっちゃ楽しみやった。

ウチらの担任の先生は夏休みやからってだらだらした生活すんなよ、お前ら受験生やねんから言うて説教垂れてたわ。今日の夏祭りも夜九時までには家に帰れとも言うてたかな。でもウチはそんな聞き流してた。

はよ夜になって欲しい、そればかり考えてた。

長かったわ。お昼回ってやつと下校時間になった。カナちゃんは部活の用事があるから言うて学校に残ってん、カナちゃん吹奏楽部やし。せやからウチは一人で歩いて帰ってん、いや、走ったわ。夜までまだまだ時間あるのに楽しみでしゃあなくなって自然と走ってもうててん。小学生みたいやろ。

それで約束の夕方六時。

郵便局の前のバス停。

ウチは……そこに行かへんかってん。

きつとカナちゃんはずつとそこで待ってたんやろな、ウチの事。カナちゃん優しい子やから。七時んなっても、八時んなっても……待ってたんやろな。ウチとお揃いで買った紫色の朝顔の浴衣着て、誰も来おへんバス停で、一人ぼっちで。

約束破ってもうてん、ウチ。

多分カナちゃん、ウチの事……嫌いになったやろな。

なあ、アンタ……ウチって悪い子？

うん、どうしても行かれへんようになってん。でもその事カナちゃんには伝えてなかった。せやからカナちゃんはずつと待ちぼうけや

ったと思う。それからカナちゃんとは会ってないねん。嫌いって言われるんが怖いから……。

謝ったら許してくれるって？

ほんまかなあ……。でも何かごめんな急にこんな話聞かせて。最後まで聞いてくれてありがとうな。

ところで、アンタは悪い事とか絶対せえへんの？

……。

ほんまに？ まあ先生やもんな。嘔吐いたり約束破ったりなんかそんな事する筈ないよな。そやんな……。

……。

あれ？

今、そろくらいが動いた。

アンタ……もしかして……嘔吐いた？

ほら見て、麻袋の中でごそごそ動いてるで。しかもちよつと……さつきより、重くなってんねんけど。

なんや、アンタも悪い事すんねや。小学校の先生言うてもやつぱり人間やねんな。なあ、今までどんな悪い事したん。ちよつとウチに教えてみいや。嘔吐いたらそろくらいが大きくなるから氣いつけてや。

ウチに何か嘔吐してる？

……。

あ、またごそごそ動いた。へえ、また嘔吐いてんねや。小学校の先生言うんはほんまなんかも知らんけど、遠足の下見しとったんは嘔っぱいなあ……。そやろ？

ほら、そろくらいが暴れてるで。

うわあ、かなり重なつてきてウチもう持ってられへんわ。あかん、袋も破られそうや……。これ以上嘔吐いたら喰い殺されるかもしれへんで、ほんまに氣い付けや。

何、引き攣った顔してるんよアンタ。嘔吐かへんかったらええだ

けの話やんか。何も難しい事あれへん。

で、他にどんな悪い事してきたんかな。

泥棒？ 詐欺？ 裏切り？

ああ、袋が破れる。

もしかしてアンタ……

……人殺した。

とか？

……。

………。

ちよつと！

何すんの、やめてや！

返して、ウチのそらくらい返してや！

あかんって、そんななんしたらそらくらいが死んでまう。ほら、見て。そんな叩きつけたりなんかしたから血い滲んできてるやんか……

……お願いや、もうやめてえや……ウチのそらくらい……。

あ、包丁！

ちよつと、アンタ何考えてんの……。

やめたって……いやああ！

……。

………。

………。

非道いな、アンタ……。

そらくらい、もう動かへんようになってもうたわ。あああ、何も殺す事ないやん。叩きつけられて、その上包丁で何べんも刺されて。可哀想に、恐かったやろうに、痛かったやろうに。まだ子供やったのになあ。

今更謝られても遅いって。そんなんしても生き返らへんねんから、この子は。

それよりアンタ、殺つてもうたな、そらくらいを……。やつぱりアンタはウチが思つてた通りの人間やったわ。  
何よ？

こんななんつても連れて帰るわ。穴だらけにされて血でべたべたでもこんなところ置いて行く訳にはいかへんもん。  
行くで。もう出口の鳥居も見えてきたわ。

ああ、笑つてまいそう。え、アンタが非道い人間過ぎてな……。  
ああ可笑しい可笑しい、あははは。

ちよつと訊くけどな。アンタ、ウチの事知らんの？  
ほんまに？

そやろな。アンタはウチの名前も声も知らへんねやろな。お面外しても多分顔も知らんと思うで、アンタはウチの顔は見いへんようにしてたみたいやから、わざと。

ウチは……知つてんで。アンタがウチの事知らへんでも、ウチは知つてんねんで……アンタの事。

一昨日、何でウチがカナちゃんとの約束破ったか教えたらか？



あの日の学校の帰りな、ウチ……浮かれてたわ。

カナちゃんとお祭行くんが楽しみで楽しみでウチもぼおとしながら走つとつたんもあかんかってんやろな。

はよ家帰つて昼ご飯食べて、ちよつと宿題済ませて、それからお母さんに浴衣着せてもろて待ち合わせのバス停まで行く。それからお揃いの浴衣着たカナちゃんとお喋りしながら神社まで歩いて行って、金魚掬いやつて、かき氷食べて……。

そんな事ばかり考えてた。

あんな、学校からウチん家まで近道あんねん。

カナちゃんともようその道通んねんけどな、団地の坂道下りて田圃<sup>んぼ</sup>をぐるつと回らんとそのまま畦道<sup>あぜみち</sup>突き抜けんねん。ほんまやった



ら勝手に通ったら農家のおっちゃんに怒られんねんけど、その時は誰もおらんかったからウチ畦道通ってん。

でな、畦道から道路に出たらウチの右側から聴こえてんクラクシヨン、ぱっと右向いた時にはもう遅かったわ。

ほんまに時間がゆっくりに感じるもんやねんな。

ウチ……撥ねられてん。

コンクリートの地面に叩きつけられた時、全身の骨がばらばらになったかと思った。ごろごろ転がって仰向けに倒れた。鼻と喉の奥から鉄臭くて温かいどろどろのものが溢れてくるような氣いした。

ちらっと車の方見たらウチ撥ねた運転手が真っ青な顔してる。ハンドル握って震えたまま目え見開いてウチの事じっと見とった。

誰も畦道からウチが飛び出してくる思わなかったんやろな。

ウチはコンクリートの上に倒れてとろとろの鼻血垂らしとった。

痛いって言うん通り越してわけ分からなかったわ。せやけど頭だけは妙にはっきりしとってん。

倒れてる場合とちゃう、はよ帰って夏祭り行く準備せな。

そう思っても、手も足も言う事聞きよれへん。そこらへんでやっ  
と、痛い、と言うんが分かったわ。

ちよっと体動かしただけでも鈍い痛みが駆け回んねん。肘も変な方向に曲がってた、多分折れとってんやろな。

それからウチ、芋虫みたいにもぞもぞ這って起き上がろうとしてん。はよ帰ってお祭り行きたかったし。

そしたら、びっくりしたで……ほんまに。

ウチの事撥ねた車あるやん、それがいつの間にか後退バックしとってん。うわぁこれって轢き逃げってやつやん、最悪や。そう思ってちよつと悔しかった。そしたらもつとびっくりする事起こってん。

その車な……もっかいウチの事、撥ね飛ばしてん。

思いつきり助走つけて……

……今度は、わざとや。

またウチは硬くて陽に焼けて熱いコンクリートに叩きつけられて

な、田圃の中に落ちてもうた。真っ白やった夏制服も血と泥で汚い色なってもうてる、指一本動けへん、胸も痛いしもう声も出されへん。

田圃の泥水に顔半分浸けながら、その時ウチ思ってたん。

流石に夏祭り行かれへんかもしれへん。

……カナちゃん、ほんまにごめん、って。

ぴちゃ、誰かが田圃に入ってきた足音や。体なんかもうどこも動けへんから目えだけ動かして足音した方に向いてん。そしたら、そいつウチの事二回も撥ね飛ばしたあの運転手やってん。そいつ、ぽかんとしながらウチの事見下ろしてじっと立ってる。それから屈み込んだ思ったらウチの体、頸とか胸とか手頸とか、ぺたぺた触ってくる。

……何してんねやろ。

その時、ウチと目え合ってたん。

その瞬間そいつの顔、真っ青になってた。何かめっちゃ怯えてるみたいやった。ウチの顔、そんなに酷い事なってたんかな？

そしたらそいつ、弾かれたみたいにいきなりウチの髪の毛引っ掴んでウチの顔泥水の中に押し込んだ。

苦しい、気持ち悪い、臭い、死ぬ。

ぬめぬめした汚い泥水が鼻と口から入ってきて吐きそうなぐらい気持ち悪かった。それが口の中で血と混ざって変な味やった。息も出来へんし、ウチこのまま死ぬんや、と思ってた。

それで思いつきり髪の毛引っ張られて泥水から引っ張り出されてん。ウチがひゅうひゅう息してんの見て、そいつまた青なつたわ。いや、今度はそれどころか泣きそうになってたかもな。

ウチは髪の毛掴まれたままや。今度は田圃の縁石ふちいしにな、思いつきり顔から叩きつけられてん。何回も、何回もやで。

鼻が折れんのも頬の骨が折れんのも自分で分かったわ、ごきごきって音が直接頭に響くねんもん。

そいつ、その時何か言うとしたで。

……何で死なんねん。

……死ね！

……早く死ねや！

……頼むからもう死んでくれ……。

ウチは顔の形が変わるぐらい縁石にぶつけられた。もう頭もくらするし引き攣りすら起こらへん。

そいつも疲れたんか知らんけど、もう止めてくれたわ。そしたら今度は襟首引っ張って泥と血いでどろどろのウチを田圃から上げた。ウチはそいつのトランクに放り込まれてん。

重い音立てて蓋閉められた真っ暗なトランクの中、鍵まで掛けられてウチはそのまま運ばれて行った。

ウチが撥ね飛ばされてからどれぐらい時間経ったんか分からへんけど多分、そいつの家の車庫かどっかなんやろな。何の音もない、何の光もない、ただ真っ暗で息苦しくて蒸し暑いトランクの中で……じっとしてた。

悲鳴上げようにも、もう声も出えへんねん。暴れて蓋こじ開けようにも、もう指一本動けへんねん。だからウチ……じっとしてた。じっとしてるしか出来へんかってんもん。

遠くの方からお祭囃子が聴こえた……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～

……ごめんな、カナちゃん。

……ほんまにごめんな。

ウチ、約束破りの大嘘吐きや。

紫色の朝顔の浴衣着て、郵便局の前のバス停で一人ぼっちでウチの事ずっと待ってるカナちゃん。

そんなカナちゃんの姿想像して、ウチちよっただけ泣いた。

あ、もう着いたな。右の鳥居が現世行きやで。ここでお別れでもええんやけど、この話まだ続きあるからもうちよっと聞いてくれへん？

そんな事言わんと聞いてや。

ここからが面白いねんから……。

次の日は丸一日トランクに入れられたままやったわ、何も食べてへんし何も飲んでないねん。

もう涙も出えへんかったわ。

そんな時、話し声が聴こえてきた。ガレージにも家の中の音が入って来るみたいで、そんな会話の中からウチ撥ね飛ばしたやつ……ちよつとずつ分かってきてん。

名前とか年齢とかそんなんは分からへんねんけどな、取り敢えずどんな仕事してるかぐらいは分かったわ。

小学校の先生やねんて、そいつ。

信用第一の教師が人身事故なんか起こしてもうたら教壇にもまとも立てんようになるもんな。仮に法律の上で罪償っても、それでも世間の皆は叩くもんな。テレビ、新聞、雑誌、インターネット。色んな角度から悪口言われる。そうだったら先生なんかやってられへんようなる。

そやから、事故がばれるぐらいやったらウチの事殺してもうて隠したらええと思ったんやろな。

それに事故を隠さなあかん理由、どうやらもう一つあるみたいやってん。

あんな……。

暗いトランクの中で耳澄ましてたらな、声が聴こえるんよ。そいつの声とちゃうで、可愛い声か聴こえんねん。

ちっちゃい女の子の声や。

そいつの娘なんやろな、まだ小学校にも上がってないような感じの可愛い声やったわ。

学校の先生やってられへんようだったらその子育てていかれへんしな、そうじゃなくてもその子が親の事故の所為でいじめられたりするかもしれへんし。

で、その次の日、つまり今日やな。

その女の子が保育園行く前、ガレージ覗いたんや。それでなその時一緒におった親、つまりウチ撥ねたやつに言うてん。

なんか……くちやい、て。

その時、そいつ真っ青なったやろな。そう、骨ばらばらの顔ぐちやぐちやになったウチの体は生きながら死んでいつててん。

真夏にじめじめしたトランクの中に二日以上も詰め込まれてたんやから汗臭いし垢だらけやし、怪我したところも膿んでじゅくじゅくやし、なんや言うたら蛆<sup>うじ</sup>とかも湧<sup>わ</sup>いとったんちゃうかな。

それで今日の昼。

そいつウチをトランクに乗せたまま車出してん。どれくらい動いとったやろ、曲がり角の度<sup>たび</sup>にトランクの中でウチの体も転がって肉とか骨とかぎちぎち軋<sup>軋</sup>んどったわ。

車が止まって、トランクの蓋も開いた。

めっちゃ眩しかった。よう周り見たらウチも知ってる場所や、どうやら町外れの山沿いの県道で停めてたみたいやった。

そんなんより何十時間ぶりに見るお日様やろ、何十時間ぶりに吸う新鮮な空気やろ。そやけどウチには飛び跳ねて喜んだり、逃げて警察行くような力も残されてへんかったわ、残念な事にな。

そいつはめっちゃ厭<sup>いや</sup>そうな顔でウチの事見下ろしてた、汚いものでも見るような目で見下ろしてた。まあその時のウチはほんまに汚かってんけどな。それにそいつにとってウチなんかもう人やあれへん、物やわ。モノ。だからウチは汚いもの（、、、、）やってん。

それでウチは毛布でぐるぐる巻きにされたわ。

こんなクソ暑い日に毛布やで、最悪やろ。しかもその上から紐<sup>ひも</sup>ま<sup>むし</sup>で巻き付けられてんで、ほんまもう苦しいて苦しいて……。

糞虫<sup>みのもし</sup>みたいになったウチはそのまま担がれて山の中に連れて、いや、持って行かれたんよ。それで大体一時間ぐらい経ってからやったかな、ウチは湿った土の上に投げ捨てられた、その時も骨が変な音鳴った、もう痛みは無かったけどな。次にそいつはスコップ使って地面に穴掘りだしたんや。

ウチ、自分で分かったで。

これから埋められるんや、て。

暫くしてから、ウチはゴミみたいに足の裏でぐりぐり押されて穴の中に蹴り転がされてん。ほんまにゴミみたいに。

湿った土の匂いや……小学校の時行った遠足の匂いみたいやった。変な言い方やけどウチにとってそんな匂いやってん。

……あの時もカナちゃんと一緒にお弁当食べたなあ。

……懐かしいなあ、ほんまに。

そんな事思い出してたら別の懐かしい匂いが入り込んできてん。それな、ストーブの匂いやってん。これは懐かしいな、今は夏やけど冬なったら学校が出すストーブってこんな匂いするもんな。上に給食のコッペパンとか乗せて焼いてたら先生に怒られた事あったなあ、とかそんなん思い出しとった。

うん、分かつとったよ。

灯油かけられてん、ウチ。

しゅっと燐寸<sup>マッチ</sup>擦る音聴こえたと思ったらウチの体を勢いのない火いがちろちろ包みだしたんや。ゆっくりゆっくり、毛布から燃えてく。灯油って思ったより派手に燃えへんねんな、熱くて熱くてめっちゃ苦しかったわ。映画とかでやってるみたいに、ガソリンの方が一気に燃えてくれるんやろか。

なかなか死なれへんかったわ。

じわじわ、じわじわ。

熱いし、恐いし、痛いのに声すら出えへんかった。苦しんで苦しんで苦しみ抜いて、やっと死ねてん、ウチ。

んでウチ真っ黒なるまで燃やされた後な、土被されて埋められてん。多分見つかれへんやろなあ。全く人通らない山ん中やし、燃やした上に結構深く埋められたから野犬も掘り返されへんやろうし。

そいつの所為でカナちゃんとの約束守られへんかってん、ウチ約束破りの大嘘吐きなってもうたわ。

今頃カナちゃん怒ってるやろなあ。それでも謝りに行く事も出来

へんねん。最悪、全部ウチを撥ね飛ばしたやつが悪いのに。  
悔しいわ。

ほんまに悔しい。

仕返ししたりたいわ……。

ああ、因みにウチが埋められてるんてここの山やで。

どうしたん、アンタさっきから顔真っ青やん。もしかして……ウチの事、思い出してくれたんや。

嬉しいわ、やっと思い出してくれてありがとうな。ええ、そんな今更んなって土下座なんかされても困んねんけど、謝られたってウチはもう死んでもうてんねんから……アンタの所為でな。

さっき言うたやろ、幽霊ってのは自分を殺した相手に仕返ししに来るもんなんやって、怨念そのものなんやって。

なあ……

……先生。



泣きなや。ええ大人が、格好悪い。

アンタが死んで地獄に落ちるんなか待ってられへん。ウチが自分で殺したるわ。簡単には死なさへんで、爪<sup>は</sup>全部剥いだから指切り落としてちよつとずつ輪切りにしたる。アンタがウチにしたみたいにちよつとずつゆっくり殺したるわ。

お面取って顔見せたるか、アンタにぐちゃぐちゃにされた顔を。

自分がどんな非道い事したか見てから死ね。

あはは。

何がキみたいに漏らしとんねん、ほんま傑作やな。そんなに死ぬんが恐いか。ウチも死ぬん恐かったわ、痛かったわ、悲しかったわ。ほら、覚悟しいや。

……。

なんてな……。

もうええわ、帰りいや。

え、やっぱりアンタを殺すんやめる。うん、ほんまやで。もう赦ゆるしたるわ。氣い変わったわ。

だって面白いもん見れたし。

ウチ、色々アンタへの仕返し考えててんけどな、ただアンタを殺すだけやったら物足りへん思ってたん。せやからアンタの目の前でアンタの一番大事にしてるもの壊してからアンタ自身も殺そう思ってたんな。

それでお茶屋さんのお姐さんに相談して飛脚のおっちゃんに持って来て貰ってん、アンタの一番大事なもの。

そや、最後に一つだけ教えといたるわ。あんな、ウチ……アンタに一個だけ嘘吐いてる事あんな。

何やと思う？

……。

実はな……

……そらくらいなんておらへんねん。

そやで、そらくらいなんか全部ウチの作り話。飛脚のおっちゃんもほんまはそらくらいに喰われたんじゃなくて処刑された人やねん、大昔にな。

あれ、どうしたん。

また顔真っ青なってるやん、しかも手えまで震えて。あ、もしかして分かってもうたか、自分が何やったかって。

ええと、美優ちゃんやつけ？

ウチらが騒いでもお利口さんやからずっと寝とったなあ、すやすやと。さっきのお茶屋さんにおるときもずっと大人しく寝てたらしいで。ほんまお利口さんやわ。



違うなあ…。

やっぱ……そらくらいはおるわ。

嘘を喰って育つ生物……。

アンタはウチを殺した事隠して生きていくつもりやねんやろ、小学校の先生しながら。嘘で塗り固めた人生。そうやってアンタは美優ちゃんを育てるつもりやん。美優ちゃんはアンタの嘘で作った生活で稼いだお金でご飯食べて大きくなるんやろ。

ほら、美優ちゃんはそらくらいや。

やっぱり……

……麻袋の中におったんは、そらくらいや。

うふふ、なんちゅう顔してんのアンタ。

それよりこの麻袋見てみいや。酷いもんやで、泥だらけやし穴だらけ、おまけに穴からはどろどろ赤い汁が垂れ流しや。しかも、臭いなあ。

誰が……こんな事したんやろ。

さっきまでは時々ごそごそ寝返り打ったりしとったのに、もうぴくりとも動けへんなあ。ああ、だんだん冷たくなってるで。

ちよつと袋開けてみようや、どんななってんねやろな。触った感じやけど何かどっかが干切れてるっぽいで、何か取れてるもん。何やろ、手かな足かな。

よっしゃ、開けるであけるでえ、アンタもよう見ときや。目えん中入れても痛くないぐらい可愛いんやろ？

あ、出て来た、出て来たわ。うふふ。

ほおら……。

(了)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5970m/>

---

そらくらい

2011年6月1日22時10分発行